

# 年齢要因と筆記速度測定下での表記形態

## - - 筆記実験による分析 2 - -

神戸山手女子短期大学 井上 道雄

### 【はじめに】

前回発表(日本心理学会,1995)の筆記実験は、手紙文を筆記するときに表記型 - - 漢字,ひらがな,カタカナのいずれの表記が日常よく見かけるかを評定して類型化したもの - - による表記の選択性を検討した。主観的表記頻度表(賀集,1994)から、二表記類(3表記のうち2つが70%以上で他が50%未満のもの)は、単一類(3表記のうち1つが70%以上で他が50%未満のもの)に比べて表記の多様性(ゆれ)が生じやすいと予測された。

その結果、漢字表記が一貫してなされて、表記型による表記の多様性はみられなかった。調査対象語が、高出現頻度語である点、実験課題(視覚呈示と聴覚呈示)が、筆記時間が十分にあり被験者に漢字の書き取りを想定させた点等から、漢字表記への方向づけが生じたものと考えられた。

ただし、第1と第2筆記間の表記の多様性(個人内のゆれ)は、漢字ひらがな型(10)が漢字型(1)に比べて明らかに多かった。このことは、漢字型は、安定して漢字表記されるが、漢字ひらがな型は、漢字を熟知していても、筆記時に表記の多様性(ゆれ)が生じていることを示唆した。また、いわゆる交ぜ書き表記は、漢字ひらがな型でのみ(7)みられた。

本実験では、文章筆記行動での時間要因をとりあげた。文章をできるだけ速く筆記する課題である。筆記時間を測定することにより、時間的負荷をかけた筆記状況での表記の多様性を検討した。さらに、年齢による(教育段階)表記の多様性を検討するため従来の大学生に加えて、高校生を被験者に用いて、その比較検討を行なった。

### 【方法】

(1) **筆記材料**：前回と同じ文章である。調査対象語は、文字は全て学習漢字であり、出現頻度(国研,1962)が0.100%以上の使用頻度の高い語より選んだ。表記型は、単一類の表記型(新聞,夏,等)と二表記の漢字ひらがな型(電話,心,等)を用いた。これらの表記型から各8語計16語を用いて、各手紙を構成した。( )内は総文字数と常用漢字の範囲内での漢字使用率である。手紙1：年長の人宛「成人式のお祝へのお礼の手紙」(243文字,28.3%) 手紙2：友人宛「旅先からの絵はがき」(194文字,21.6%)。

(2) **被験者**：短大1年生(平均年齢18.7)59名と高校1年生(平均年齢15.6)42名。

(3) **筆記課題**：教示(練習問題を含む)と、2つのカタカナ書きの手紙文よりなる小冊子を被験者に配布した。各頁の上半分に手紙文、下半分に筆記用に罫線がひかれている。下部には、筆記時間記入欄がある。筆記課題は、カタカナ書きの手紙文を「漢字かな混じりの文章」に、できるだけ速く書きかえることである。各手紙文は、筆記前に、実験者が手紙の宛先と内容を説明し、文章全体を読みあげた。筆記開始は、実験者の「はい」の合図でいっせいに書き始めた。時間測定は、最初に書き終わった被験者に「はい」と言って手を挙げさせ、その時点から、実験者が5秒おきに所要時間を読みあげた。筆記者は、書き終わった後に読み上げられる時間を筆記時間として記入した。筆記課題終了後、筆記文章に用いられた対象語の漢字検査(被験者には知らせない)をした。

### 【結果と考察】

**筆記速度**：表1より、年齢要因では、短大生が高校生より平均7sec.、一文字当たり30msec.速い。

また 筆記文章では、手紙 2 が一文字当たり 70msec. 手紙 1 より速い。短大生が、就学年数による筆記経験の熟達度を反映したものと思われる。筆記文章での違いは、漢字使用率で手紙 2 が手紙 1 より 6.7%低く、これが筆記速度の差をもたらしたものと考えられる。

**表記形態：**表 2 は、調査対象語について各手紙文の表記型の表記形態率を示す。漢字表記が 97%以上(平均 98.4)であった。表記型、手紙の種類に

表 1 筆記速度 (sec.)

	手紙 1		手紙 2	
高校 1 年	273	206	239.5	
短大 1 年	268	197	232.5	
	270.5	201.5		

かかわらずほぼ全てが漢字で表記された。前回報告(被験者ペースでの視覚呈示および聴覚呈示での筆記課題実験)では、漢字表記率が 98.9%とほぼ同じように漢字で表記されている。このことから、表記型・筆記文章の種類・呈示方法・速記によるバイアス等の諸要因に関係なく、高い出現頻度語の学習漢字は一貫して安定した漢字表記を示している。

速記のバイアスは、漢字表記以外の表記率に前回の結果との違いをもたらした。手紙 2 の漢字ひらがな型の漢字表記以外の表記率は、前回 2.2%であったが、本実験では 1.4%といっそう少なくなっている。特に「でんわ」で、前回多様な表記がみられたが、本実験では、ほとんどみられなかった。文章を速記させることは、筆記者に表記の多様性をいっそう小さくさせたものと思われる。つまり

表 2 筆記速度測定課題での表記形態 (%)

		漢字型					漢字ひらがな型				
		漢字	ひらがな	交ぜ書き	他の表記	表記もれ	漢字	ひらがな	交ぜ書き	他の表記	表記もれ
手紙 1	高 1	97.3	1.2	0	0.3	1.2	97.6	0.6	1.2	0.6	0.3
	短 1	98.5	0.6	0	0.2	0.6	98.5	0.6	0.6	0	0.2
手紙 2	高 1	98.8	0.9	0	0.3	0	98.2	0.6	0.9	0.3	0
	短 1	99.6	0	0	0	0.4	98.3	0.8	0.2	0.2	0.4
		98.6	0.7	0	0.2	0.6	98.2	0.7	0.7	0.3	0.2

漢字を熟知している語は、漢字の表記へより方向づけられるのではないだろうか。かな表記の方が筆記時間は物理的に速く書けるとされるにもかかわらず。逆に言えば、表記の多様性は、筆記に時間的余裕のあるときに生じると言えるかもしれない。

上記の調査対象語以外で、学習漢字で構成される名詞(以後「非対象語」という)の表記形態の結果を分析したのが、表 3 である。短大生は、対象語と同様にほとんど漢字で表記している。しかし高校生では、「正直」「実感」「自覚」において、漢字以外の表記が増加している。いずれの漢字も教育漢字であることから考えて、また、既習である点は、短大生と同じと考えられることから、高校生の習熟水準における、筆記時の漢字表記の不安定さを示すものなのであろうか。ただし、非対象語については、筆記後の漢字検査はなされていない。したがって、漢字を知らなかったためにひら

表 3 非対象語の表記形態

		正直	実感	自覚	心配	出席	元気	半分	大学
高 1	漢字	26	30	25	40	37	42	42	42
	ひらがな	14	10	9	0	3	0	0	0
	交ぜ書き	1	0	4	2	0	0	0	0
	他の表記	1	2	4	0	0	0	0	0
	表記もれ	0	0	0	0	2	0	0	0
短 1	漢字	58	59	52	59	55	59	59	59
	ひらがな	1	0	0	0	0	0	0	0
	交ぜ書き	0	0	3	0	0	0	0	0
	他の表記	0	0	4	0	0	0	0	0
	表記もれ	0	0	0	0	4	0	0	0

がな表記になったのかもしれない。さらなる検討が必要である。